

いわて防災学教室

災害から学び、災害に備える



震災をふり返るとー避難の大切さー

岩手大学工学部社会環境工学科准教授

小笠原 敏記

2011年3月11日14時46分、牡鹿半島から東南東方向に130km離れた地点を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震が発生した。このとき、私は大学校舎の3階研究室にいたが、大きな揺れを感じてから、いつまで続くのかと思うほど大きな揺れが続いた。本震の揺れが静まった後、校舎の外に避難していると、ある学生の携帯電話のワンセグから、いくつもの貨物コンテナが流されている様子が映し出されていた。直近では2010年のチリ地震津波や2004年インド洋大津波の被害状況を見て来たが、この映像を見たとき、今まさに津波が三陸地方に襲来している現実を容易に受け入れられなかったことを憶えている。

被災地を初めて訪れたのは、震災から6日後のことであった。向かった先は、宮古市角力浜地区である。この地区は、津波防災施設のない無防備な地区であったことから、2005年に地区の住民、行政(宮古市、岩手県)、コンサルタント、大学が参加し、津波避難を考えるワークショップを開催した場所であった。ワークショップでは、まち歩きから避難経路を点検し、避難の問題点とその解決策を考え、避難を軸とした防災対策の行動計画を作成した。その後の地区の防災活動は、津波避難マップを自費製作し、さらに毎年3月3日に避難訓練を継続してきた。ソ

フト的な津波対策を住民と一緒に考えた思い入れ深い地であった。

現地に入ると、ワークショップの会場として利用した公民館の姿はなく、周囲の建物も基礎部分のみが残った状態で、その残骸や変形した車などが至る所に無造作に堆積していた。津波によってまちの様子が一変してしまったことは明白であったが、当時の地区会長に会うことができ、避難の様子を聞くことができた。30世帯で110名の方が暮らしていたこの地区に第一波の津波が襲来したのは、地震発生から約30分後のことであった。このときは、全員が高台に避難して難を逃れたが、1名の方がその後自分の漁船の様子を見に行ったら、2波目の津波の犠牲になってしまった。津波は何度も押し寄せ、1波目の後に来る波の方が大きくなることもあり得ることを知っていたらと…。

1名の方が亡くなってしまったことは残念であるが、多くの方が迅速に高い所へと避難したことは、津波避難マップに記されていた言葉、「何が起きても生き抜く力を持とう!!」を実践した証であり、地道に年1回の避難訓練を継続してきた結果と言える。現在、安心・安全なまちを目指して、防潮堤の建設が進められているが、津波の危険を感じたら高い所へ避難する基本的なことを忘れないでほしい。